

第一コリント11:27-32の解釈

「自分自身を吟味して食べないと、さばきを受け、病気や死を招く」という意味を、聖餐を受けるときに、「自分個人の罪を悔い改めて食べないと、毒になる」かのような解釈が良く見受けられます。

この箇所は、11:17-34の段落の中で語られ、兄弟愛の一致が問題とされています。主のからだである教会と一緒にひとつになる食事なのに、そのキリストがご自分の体をもってあがなってください、主のみからである教会をわきまえないで飲み食いするなら、その集まりがさばかれる。我先にと酔ってしまうほどの者もいる。ローマの当時の暴飲暴食は、病気や病死を招いたものだと思います。霊的にもそうです。だから集まりが、この世的になることなく、主にある食事の集まりとなるように、我先にではなく、待って一緒に食べなさいと教えている。そのような解釈は成り立ちますか？

OpenAI o1

結論から申し上げますと、「第一コリント11章の警告は、単に各個人が自分の罪を悔い改めて聖餐を受けるかどうかだけに焦点があるのではなく、むしろ教会(キリストのからだ)の一致を軽んじ、愛の交わりを破壊していることへの戒めである」という解釈は十分に成り立ちます。

1. 文脈(コンテキスト)から見た理解

第一コリント11:17-34の流れ全体を読むと、パウロは「コリントの信徒たちが主の晩餐にふさわしくない態度で臨んでいること」を問題視しているのが分かります。そこには二つの大きな点が示唆されます。

1. 分裂や侮り(11:18-22)

- 「あなたがたの間に分裂がある」と述べ、また「飢えたままの人もいる一方で、酔うほど飲んでいる者もいる」(11:21)とパウロは指摘しています。
- これは当時の「聖餐(主の晩餐)と愛餐(アガペーの食事)が結び付いた形」で行われていた集まりの中で、富める者と貧しい者とが分断され、愛に基づく交わりが壊されている状況を非難しているのです。

2. 「主のからだをわきまえない」という警告(11:27-29)

- 「主のからだをわきまえずに食べ飲みするなら罪になる」という言葉は、「パンとぶどう酒を通して示されるキリストの十字架の犠牲」と同時に「キリストのからだである教会(信仰者の交わり)を軽んじていること」への警告とも読めます。
- 「からだ」は単にキリストの身体(パンとぶどう酒の象徴)だけを指すのではなく、「キリストにある共同体としての教会(兄弟愛をもってひとつになるべき集まり)」も意味すると考える解釈は多くの注釈書などで支持されます。

2. 病や死(11:30-32)との関連

パウロは「あなたがたの中に弱い者や病人が多く、眠っている(死んでいる)者もいる」(11:30)と言及します。ここをどう理解するかは大きく二通りに解釈されてきました。

1. 神の超自然的なさばき・懲らしめ

- 神が裁きとして、超自然的に病や死をもって警告を与えられた(旧約聖書にあるような神の懲らしめの出来事と同様)。

2. 乱れた食生活や悪習による結果

- 乱飲乱食により身体を壊し、早死にするケースが起こっていたと考える見方。
- コリントの人々が、偶像礼拝の祭りやギリシャ・ローマの乱宴の影響を受けた風習のまま、教会内の交わりを台無しにしていた現実的な側面がある。

実際には、どちらか一方に限定するのではなく「靈的次元における神の訓戒」と「生活習慣の乱れによる身体的悪影響」の両側面があると見ることができます。パウロ自身は「主がさばかれるのは、私たちが世とともに罪に定められないためだ」(11:32)と述べ、これを「悔い改めへ導くための神の訓戒」と位置づけています。

3. 「自分自身を吟味する」とは何を指すのか？

よく「個人的な罪をしっかりと悔い改めないと、聖餐が“毒”になる」というような極端な言われ方があります。しかし文脈を見ると、パウロが言う「吟味」は単なる個人的罪の点検というより、

- 「自分は本当にキリストの体(教会)の一致と愛の交わりを大事にしているだろうか」
- 「主の十字架によって赦された者として、へりくだって隣人を愛しているだろうか」

という、共同体の交わりに対する姿勢の自己チェックも含まれています。もちろん個人の罪の悔い改めは重要ですが、パウロはここでより強く「交わり全体を無視している態度」を問題としているのです。

4. 待って、一緒に食べる(11:33-34)という勧め

最後にパウロは「あなたがたは互いに待ち合わせて食事をしなさい。空腹な人は家で食べるべきだ」と言います(11:33-34要旨)。

- ここは明らかに、「同じテーブルにつき、全員で分かち合う」という交わりのあり方を強調しています。
- 「主の食卓にあずかる」とは、本来キリストの自己犠牲によってもたらされた愛の交わりを味わうことであり、その場で分裂や差別が生じては意味を失ってしまうのです。

まとめ

したがって、質問で述べられているように、

主のみからだである教会をわきまえないで飲み食いするなら、集まりが裁かれる。実際の暴飲暴食も身体を害し、死を招いたであろうし、靈的にも神の懲らしめを受ける。だからこそ、「我先に」ではなく愛によって互いに配慮しあい、一緒に食べるという解釈は文脈に即した非常に妥当な理解です。

結論として、第一コリント11:27-32でパウロが特に問題視しているのは、教会の一致を軽んじ、愛の交わりを台無しにしている態度であり、その延長線上で個人的な罪の悔い改めも含めた「吟味」を促していると読むことができます。単に「個人的な罪を悔い改めないと毒になる」という狭い理解にとどまらず、「自分自身の態度が教会全体の愛と一致を守るものかどうか」を吟味するという面を強調している、と考えることができるでしょう。

ローマ時代の世の状態は、Rom 13:13 Gal 5:21に書かれていますね。

OpenAI o1

はい。ローマの時代背景として、ローマ13:13やガラテヤ5:21に「乱痴気騒ぎ（どんちゃん騒ぎ）や酩酊（泥酔）」「淫乱」といった描写があるように、当時の社会にはかなり乱れた飲食習慣や道徳の荒廃が存在しました。

第一コリント11章でパウロが

「酔う者がいる」「飢えている者がいる一方で豊かに食べている者がいる」（1コリント11:21要旨）

と指摘しているのは、まさにそのような風潮が教会の交わりの場に持ち込まれてしまったことを意味しています。彼らは愛の食事（アガペー）や主の晩餐に際しても、この世的な乱れ（“我先に”の飲み食い）をそのまま持ち込んでいたのです。それゆえ、**互いを尊重し合い、愛の交わりを大切にすることを**パウロは強く促したわけです。

- **ローマ13:13**

「宴楽や泥酔、淫乱や好色、争いやねたみ」

- **ガラテヤ5:21**

「妬み、酩酊、遊興」

これらは当時の一般社会に蔓延していた風習ですが、**キリストにあって新しい生き方に召された者たちにはふさわしくない**とパウロは一貫して警告しています。そして、その警告が「聖餐」の場面でも適用されているのが、第一コリント11章の文脈といえます。

1Co 11:32 「しかし、さばかれるとすれば、それは、この世と共に罪に定められないために、主の懲らしめを受けることなのである。」 と言われている「この世」のことですよ

OpenAI o1

おっしゃる通り、第一コリント11:32でパウロが言う「この世と共に罪に定められないため」という表現の「この世 (the world)」は、神に背を向けたまま生きる不信仰な世界全体、あるいは終末における裁きの対象となる「世のかたち」を指しています。

- **1コリント11:32**

「しかし、さばかれるとすれば、それは、この世と共に罪に定められないために、主の懲らしめを受けることなのである。」

ここでパウロは「主の懲らしめ」(discipline)を受けるのは救いの目的であり、それによって最終的な裁きにおいて不信仰な世(神に従わない人々の集まり)と同じ扱いを受けないようにしているのだ、と説明しています。

「この世」とは

- 新約聖書における「この世」(ギリシャ語: κόσμος/kosmos)は、多くの場合「神の支配・法則を拒否する人々の集まり」や「墮落した価値観に染まった人間社会全体」を指します。

- ローマ13:13やガラテヤ5:21が描写するような「乱痴気騒ぎや泥酔、淫乱や争い」など、神にふさわしくない習慣・価値観に浸った状態です。

教会と「この世」との対比

- 第一コリント11章の文脈では、コリント教会の中に「世の風潮」が持ち込まれ、主の晩餐(愛の交わり)が分裂や我欲、乱飲乱食によって汚されていたことをパウロは問題視しています。
- パウロは、神の家族に連なる者(教会)がそのような「世の在り方」にとどまり続けるならば、最終的には神の裁きにおいて「この世と共に」滅びに向かうことになるかと警告します。
- しかし主はあえて「懲らしめ」をもってご自身の子どもたちを正しい道へ立ち返らせようとしてくださる(ヘブル12:6など参照)ので、私たちは悔い改めて改心し、「この世の姿」に巻き込まれたままで終わらないようにすべきなのです。

まとめ

「この世」はまさにローマ時代の乱れた風潮(ローマ13:13、ガラテヤ5:21等)も含めて、神に反抗する罪の支配下にある世界全体を指し、コリントの信徒たちはその「世的な歩み」のまま聖餐に預かることを戒められていました。パウロは、そのような状態のままでは「世とともに」裁かれることになるため、神の懲らしめ(訓練)を真摯に受け止めて悔い改めるよう促しているわけです。

1コリント10:16-17ですでに「ひとつのからだ」だと言っていますよね

OpenAI o1

はい。その通りで、**第一コリント10:16-17**において、パウロはすでに「私たちは皆ひとつのパンを分かち合っているので、ひとつのからだである」と述べています。

1コリント10:16-17 (新共同訳)

私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。

私たちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではありませんか。

パンは一つですから、私たちは大勢であっても一つの体なのです。

すべての者が一つのパンを分かち合うからです。

ここでパウロは、**聖餐におけるパンとぶどう酒にあずかることが、キリストの体と血への交わりであり、教会は皆でその一つのパンを分け合うゆえに「ひとつのからだ」である**という事実を強調しています。

ところが、**1コリント11章**では、その「ひとつのからだ」であるはずの教会の交わりが、**分裂や自己中心的な振る舞いのせいで台無しになっている**（“ある者は酔うほど飲み、ある者は飢えたまま”というような不公平や放縦）ことが問題視されています。

- すでに「**私たちは皆ひとつのからだだ**」と言っているのに、行動がそれにそぐわない。
- だからこそパウロは、「主の晩餐にあずかるにあたって、自分自身を吟味し、教会の一致と愛の交わりを大切にしているかどうかを問うべきだ」と促しているわけです。

要点

- 1コリント10:16-17**で「**私たちが一つのからだである**」という事実を確認。

2. **1コリント11章**で、その“事実”に対して行動が一致していない（分裂や自己中心）問題をパウロが糾弾。
3. 「ひとつのからだ」である教会をわきまえずに聖餐に預かることは、**キリストの犠牲を軽んじるだけでなく、教会という共同体の交わりをないがしろにする行為に他ならない。**

こうした流れからも、“**教会はキリストのからだとしてひとつである**”という認識と、それに見合った愛の交わり・一致した行動が非常に重要であることがわかります。

パンが一つ、と言うことと10:3-4の同じ霊的な食べ物と飲み物は対比出きるでしょうか？

また、10:7「民が座っては食べて飲み、立っては戯れた」と、11:21「我先に食事をする」コリントの教会の状態は対比できるでしょうか？すると10:8のモアブの女たちとの不品行が偶像礼拝とセットだったことを考えると、コリントの教会の聖餐式の問題が、教会の不品行と偶像礼拝の問題に関わっていると言うことが浮き彫りになって来る気がしました。

OpenAI o1

結論から言いますと、1コリント10章と11章の記述には相互に対応する・対比できる点が多く、パウロが旧約のイスラエルの失敗例（偶像礼拝や性的乱れ）を引き合いに出しながら、コリントの教会にも同じ過ちを繰り返さないよう警告しているという構造がある、と見ることができます。

1. 「同じ霊的な食べ物と飲み物」（10:3-4）と「パンが一つ」（10:17）の対比

1コリント10:3-4では、イスラエルの民が**荒野で「同じ霊的な食べ物」「同じ霊的な飲み物」を与えられた**（マナや岩から出る水）と述べられ、それが「キリスト」を象徴しているとパウロは解説します。

一方、10:17では、「**パンは一つであるゆえに、私たちは大勢であっても一つの体である**」と言及しています。

- 「同じ霊的な食べ物・飲み物」にあずかったイスラエル
 - 荒野でマナを食べ、水を飲んだが、なお偶像礼拝や不品行に陥った。
- 「同じパンにあずかる」教会（キリストの体）
 - キリストの犠牲によって一つとされているが、なお分裂や我欲、偶像礼拝・不品行と結びつく振る舞いに陥る危険がある。

パウロは、旧約の民も恵みを受けていたが失敗したという例をあげることで、**今や教会も「同じキリストにあずかる」ゆえに油断せず、自分を吟味する必要がある**と警告していると考えられます。

2. 10:7「民が座って食べて飲み、立って戯れた」と11:21「我先に食事をする」の対比

- 10:7

「彼らは座っては飲み食いし、立っては戯れた」

これは出エジプト記32章（黄金の子牛事件）を引用しており、「食べて飲む」行為自体が問題というより、その背後にある**偶像礼拝と墮落的な宴**を示しています。「立って戯れた」は性的乱行を含む混乱を指す表現と広く理解されています。

• 11:21

「食事のときに、ある者は我先に自分の食事をとって飢えている人を顧みず、他の者は酔うほど飲んでいる」

これは、**愛の食事・聖餐の場での乱れ**を指しています。「我先に」とは自己中心、乱飲乱食、分裂、貧富の差の放置など、当時の異教的な宴会習慣が教会に持ち込まれていたことを示します。

両者を比べると、

1. **偶像礼拝や肉欲的な宴**（出エジプト記32章）を受け継ぐかのように、コリント教会も主の晩餐を汚していた。
2. 「主の晩餐」という霊的に重要な場であるにもかかわらず、**この世的な（ローマの乱痴気騒ぎと似た）形で食べ飲みをしてしまう**。

こうして、パウロは旧約のイスラエルの墮落した宴会（偶像礼拝）を思い起こさせつつ、コリントの信徒の振る舞いを戒めているのです。

3. 10:8の不品行・偶像礼拝と、コリント教会の聖餐式問題との関連

10:8でパウロは、「彼らは不品行（ポルネイア）を行い、（神の怒りを受けて）二万三千人が倒れた」と言及します。これは民数記25章（モアブの女たちとの姦淫の場面）に基づいた話であり、**性的な乱れと偶像礼拝がセット**になっていたことを指します。

1コリント全体では、

- **5章**：血縁上の不品行を含む性的な乱れ。
- **6章**：売春婦と交わる罪（身体を汚す行為）。
- **8章, 10章**：偶像の宮での宴や偶像へのいけにえの肉を巡る問題。

パウロはこれらの**不品行や偶像礼拝**に警告を与えつつ、**11章の「聖餐の乱れ」**も実は同じ根っこ（この世的・偶像的な価値観、自己中心）が原因だと示唆しています。

結局、キリストにある交わりを乱す行為は、**性的乱れであれ、偶像礼拝であれ、聖餐の乱れであれ、同じ「神への背き」や「隣人軽視」につながるのだとパウロは語っています。**

4. まとめと適用

1. 旧約の失敗例（出エジプト記や民数記）の再来

- 「同じ霊的食べ物と飲み物（＝キリストの恵み）を受けながらも、偶像礼拝と不品行に陥ったイスラエル」と、「**聖餐（キリストの体と血）を受けながらも、自己中心に走るコリント教会**」が対比されている。

2. 飲み食いの乱れは偶像礼拝・不品行とつながる

- 旧約の「民が座っては食べ飲み、立っては戯れた」（黄金の子牛事件）と、コリントの「ある者は飢え、ある者は酔っている」状態が平行している。
- パウロの狙いは、教会の中で繰り返されている自己中心や道徳的混乱が、「偶像礼拝と大差ないほどの深刻な背き」であると気づかせること。

3. パンは一つだが、「ひとつ」のはずの交わりが壊されている

- 1コリント10:16-17で“パンが一つ”であるという神学的事実が提示される一方で、11章では実際に**分裂・差別・乱れ**が露わになっている。
- 神の前で「一つの体」を崩すような行為は、**偶像礼拝や性的乱れと根が同じ罪**であり、厳粛な警告の対象となる。

したがって、**1コリント10章と11章は、旧約のイスラエルの背き（偶像礼拝や性的乱れ）と、コリント教会の聖餐における不品行や分裂を平行・対比させる形で書かれ、パウロは彼らに悔い改めを迫っています。**これらの箇所をあわせ読むと、コリントの聖餐式の問題は単に「食べ方のマナー」程度にとどまらず、教会の不品行・偶像礼拝と深く関わった、極めて深刻な罪として捉えられていることが浮き彫りになるわけです。